

加瀬みきの ワシントン発 グローバル随想



イラスト・題字：長峯亜里

第33回

アメリカ人の戦争観

アメリカの孤立主義

アメリカは戦争好きなのだろうか。アメリカ・ファーストを掲げ、他国への介入を非難してきたトランプ大統領だが、イランの核施設攻撃、ベネズエラのマドゥーロ大統領夫妻拉致、ソマリア、イエメン、シリアへの攻撃、そして対イラン戦争と次々に軍事作戦を展開している。

しかし欧州は長年アメリカの孤立主義に不安を抱いてきた。第一次、第二次世界大戦では、欧州が瓦礫^{がれき}と化すまでアメリカは参戦しなかった。また、真珠湾攻撃がなければ、ルーズベルト大統領は国民に戦争の必要性を説得できなかっただろう。この苦い経験から北大西洋条約機構(NATO)が創設された。連合軍最高司令官がアメリカ人であるのも、欧州各国に米軍基地があるのも、次に西欧が攻撃されたら即刻アメリカの参戦を余儀なくさせるための保険である。

決して忘れられない戦争

東西の冷戦中、米ソが直接軍事衝突をすることはなかったが、代理戦争といえる朝鮮戦争とベトナム戦争が、アメリカをさらに戦争嫌いにしたのは間違いない。

朝鮮戦争は「忘れられた戦争」といわれる。3年間の戦闘で米軍は死者、負傷者、行方不明

者計10万人という犠牲を払ったにもかかわらず、平和条約は締結されずいまだ休戦状態で、何事も勝利にしか価値を見いださないアメリカ人には憤懣^{ひんまん}の残る結末であった。

一方、「決して忘れられない戦争」がベトナム戦争である。インドシナ植民地を手放せなかったフランスを支援するうちに、アメリカが戦争の当事者となってしまった。「ろくな武器も持たない農民集団は簡単に打ち負かせる」という甘い考えは外れ、1975年に完全撤退を余儀なくされた。アメリカが支援した南ベトナムは北ベトナムに無条件降伏し、ベトナムは共産化した。米軍のモラルは失墜、指揮命令系統への不信が募った。死者5万8千人強、負傷者は30万人以上と多大な犠牲を払った。ピート・シーガーなどの戦争に抗議するフォークソングと共に大学のキャンパスを中心に反戦運動が広まり、政権は戦争を継続できなくなった。



1975年4月、サイゴンが北ベトナム軍の進攻によって陥落する直前、ベトコンから逃れる南ベトナム人をCIA職員が必死でエア・アメリカのヘリコプターで避難させた。